

平成26年度スーパーバイザー事業報告書

研究主題

かかわりあいを通して、新しい学びを創造する子どもの育成
～ジグソー法を用いて、「説明できる力」を伸ばす学習デザインの構築を目指して～

日南町立日南小学校

日南町立日南中学校

スーパーバイザー：東京大学 大学総合教育研究センター 三宅 なほみ 教授

1 はじめに

本校は平成21年度、町内全ての小学校が統合し日南中学校に隣接する形で開校した。小学校の統合により町内1中学校、1小学校となり、立地条件にも恵まれていたため、開校当初より小中一貫教育を指向しながら教育活動を進めている。本研究も小中が同じ方向性を持ちながら推進している研究の1つである。

研究に際して、まず本町の児童生徒の課題を次のように把握した。

- ・受動的な行動が多く自己表現が苦手である。
- ・自尊感情の低さが意欲面にも表れ、学力不振につながっている。

このような課題を改善し、しっかりと自己表現しながら意欲的に学習に取り組む児童生徒の姿をめざして、ペア、グループなど「かかわりあい」のある学習スタイルを重視しながら研究に取り組んできたが、学習場面に活動をどう位置づけるかが難しく統一感のある学習スタイルを確立するには至らなかった。そういう状況の中で協調学習の1手法である「知識構成型ジグソー法（以下ジグソー法）」と出会い、ジグソー法の授業スタイルをベースとしたかかわりあい活動の充実を行いながら研究を進めている。

2 研究のねらい

【授業改善に対するねらい】

- かかわりあう学習の具体的なモデルとしてジグソー法を位置づけ、積極的に意見交換しあう児童生徒の姿を目指す。
- 学習の中での自分の役割を自覚し、自信を持って説明したり、意欲的に話し合ったりする児童生徒の姿を目指す。
- 根拠に基づいた論理的思考力を身につけた児童生徒の育成を目指す。

【ジグソー法の理解と効果的な活用に対するねらい】

- ジグソー法の授業スタイルを理解し、その学習形態を取り入れた授業を実施する。
- ジグソー法をより効果的に実践するためにそれぞれの学習場面（エキスパート活動、ジグソー活動、クロストーク）の留意点を把握する。
- ジグソー法を取り入れた学習による児童生徒の変容をどう捉え、どう評価するのかを把握する。

3 スーパーバイザーの役割

年度当初におけるスーパーバイザーの役割は、以下の2回の小中合同授業研究会において講演及び指導講評を行い、職員の研修をより充実させることである。

- ・ 6月に実施する第1回小中合同授業研究会において授業参観して頂き、その指導講評及び協調学習とジグソー法の理論的な背景を理解するための基本研修を行う。
- ・ 10月に実施する第2回小中学校合同授業研究会において授業参観して頂き、その指導講評及びジグソー法についての講演を通して研修を深める。

4 研究の実際

6月の小中合同授業研究会は予定通り実施し、以下の内容で三宅教授の講演を行い研修した。

講演のテーマ	学ぶ力を引き出す授業のデザイン 知識構成型ジグソー法の基本から「評価とICT」
講演の概要	<ul style="list-style-type: none">・ 21世紀型スキルについて・ 主体的な学びを生み出す学習の姿・ 人はいかに「学ぶ」か・ 知識構成型ジグソー法とは・ ジグソー法で見られる学び方の変化・ ジグソー法とICT活用・ 新しい学びの評価について

10月の小中合同授業研究会においても同じように研修を深めるため三宅教授の講演会を予定していたが、三宅教授が体調不良のためお招きすることができなくなった。合同授業研究会は予定通り実施するため、大学発教育支援コンソーシアム推進機構に連絡をとり、代わりの講師の方を紹介していただき東京大学大学院教育学研究科特任助教 飯窪真也氏を講師としてお呼びすることにした。

外部講師を招聘して行う合同授業研究会は上記の2回であったが、合同授業研究会は1月にも計画していたため、町教育委員会の理解を得ながら第3回小中学校合同授業研究会にも飯窪真也特任助教を招聘し研修を行った。

結果として本校の校内研修において本事業（スーパーバイザーによる学校教育支援事業）にかかわる部分は第1回の合同授業研究会だけであるが、同じジグソー法の研究として取り組んだものであるため、本報告書では第2回、第3回の合同授業研究会についても合わせてまとめさせて頂く。

各合同授業研究会での授業実践を以下にまとめる。

【第1回小中学校合同授業研究会】（6月16日）

学年 教科等	単 元 名
小5 国 語	「物語の構成に気をつけて読み、紹介カードを作ろう」
小4 算 数	「式と計算の順じょ」
中3 国 語	「豊かな言葉『俳句の可能性』」

【第2回小中学校合同授業研究会】（10月10日）

学年 教科等	単 元 名
小2 生 活	「もっと なかよし まちたんけん」
小5 理 科	「流れる水のはたらき」
中1 社 会	「武士の世の始まり『鎌倉を中心とした武家政権』」
中3 数 学	「円の性質」

【第3回小中学校合同授業研究会】（1月30日）

学年 教科等	単 元 名
小1 国 語	「いろいろな やりかたを くらべて かんがえよう」
小6 保 健	「病気の予防『生活のしかたと病気ー生活習慣病の予防ー』」
中1 英 語	「人を紹介しよう」
中1 社 会	「オセアニア州『移民と多文化社会』」

スーパーバイザーに関わっていただいた第1回小中学校合同授業研究会における職員のご感想（一部）は以下のものである。

第1回小中合同授業研究会の振り返り

① 三宅先生の研修を受けて感じたこと。

ジグソー法や子どもの意欲に関わる内容

- ・日南に来てジグソー法について知ったので今回の研修で、今後自分の授業でも実践していくポイントなどがわかりました。
- ・必ずしも正解を出した生徒が、理解が深いとは言えない。常に意識していきたい。
- ・友だちに関わり合って学ぶことは、重要な学びの方法だと改めて感じた。ジグソー法については、その課題（部品）の作り方がポイントとなり、毎回の中では難しいが、何らかの関わり合う活動を仕組んでいきたい。
- ・「同じ問いでも一人ひとり違う問いを持っている」という言葉から、教師が正解を求める雰囲気ではなく、多様な考えを引き出す雰囲気を作ることが大切だと思った。「いろいろな考えがあるからおもしろい」というメッセージを伝えていきたい。



- ・ジグソー法を活用した授業は、子どもたち一人ひとりが対話をしながら考えを深められる、他の子の意見も取り入れて違いに気づきながら答えを求められるという点がとても良いと思いました。今回実際に授業を見て、たくさんのグループに分かれて実施するため、先生一人では子ども一人ひとりがきちんと対話をして学びを進められているか把握することが難しいと感じましたが、そこで ICT を活用することで、履歴を見ることができ、学びの足跡を確認することができるのだなと思いました。

ICT 活用等に関わる内容

- ・ICT を使ったジグソー法をやってみたいと思った。クラスの中の全生徒の意見を瞬時に比較検討できるソフト（アプリ）を使いたい。

②今後の授業で特に力を入れたい、または、改善したいこと。

- ・いかにレベルの高いことを思考させるかということが、今後の課題となってくると思った。ジグソー法の質を高めていきたい。
- ・実践あるのみ。自主公開がかけ声だけにならないようにしたい。

職員の振り返りを見てみると、本研修がねらっていたスーパーバイザーの役割である「協同学習とジグソー法の理論的背景を理解するための基本研修」はその効果を十分に果たしたと考えている。

第1回の成果を受けて第2回、第3回の合同授業研究会では飯窪真也助教による指導を受けたが、飯窪助教は学習指導案の事前指導にも関わっていただいている方でもあり、より具体的な授業展開の場面に即した指導助言をいただくことができた。特にその中で「授業デザインの精度を上げるポイント」として以下の点を指摘していただいた。



- ・「子どもの目線」を自分のものにする。
- ・子どもが「何を学んでいたか」、「どう学んでいたか」を見取る目を育てる。
- ・「人はいかに学ぶか」について自分なりに語れることを磨く。

また、従来の授業スタイルを変えていくことが目的ではなく、その背景として学習を通して育てたい資質能力の質的变化（例えば21世紀型スキル）があり、当然従来型の評価のあり方では対応できない状況が生まれてくるため、授業前後の変容を「期待する解答の要素」に照らして評価するという手法が研究されていることを紹介していただいた。ジグソー法という手法を単に取り入れるだけではなく、何の為にこのような手法で学習デザインを描き、その中での子どもの変容をどうイメージするかを総合的に捉えて実践化していく必要性を感じることができた。

飯窪助教の話を受けて職員がどのような感想を持ったか、一例だけ紹介する。

・協調学習でつく力が、付いた知識を活用でき発展させることができ、長く記憶にとどめることができることであると言われた。ジグソー法の形にこだわって身につく力の意識が下がっていたと反省した。ジグソー法がやりやすいという観点だけでなく、その学習内容の活用度、発展度等も考え合わせるべきだと思った。また児童生徒の実態に合った授業、ねらいの明確化、具体的な発問など、普段の授業でもっと鍛えるべき所がジグソー法の授業でも大切な点なのだと感じた。

5 成果と課題

スーパーバイザーとして三宅教授に関わっていただく回数は当初の予定通りには行かなかったが、ジグソー法を軸にしながらい貫した研修を行い、それぞれの段階で充実させることができたと考えている。以下に本年度の取組を振り返り、成果と課題をまとめたい。

【 成 果 】

① 型からの脱却

学習スタイルとしてジグソー法を取り入れる取組を始めておよそ2年になる。実践当初はジグソー法の一般的なスタイルである『3つのエキスパートを作り、ジグソー活動、クロストーク活動を1単位時間の中で実施する』という授業展開に固執した感がある。ジグソー法を取り入れた今年度の取組の中で徐々に理解できてきたことは、型にこだわることが重要ではなく、この学習で子どもたちのどんな力を伸ばそうとしているのかを考えながら学習デザインをしていくことが重要であると確認できた。また、1時間という枠にとらわれず、例えば単元という大きな枠組みの中でジグソー法の効果を生かした授業展開をする事も検討するようになり、型へのこだわりから徐々に抜け出そうとする動きが見られるようになった。

② ジグソー法の考え方を日常に

上の①とも関連するが、特別にエキスパート資料を用意してジグソー法を取り入れた授業を日常的に実施することは困難である。しかし、ジグソー法がどんな力を伸ばそうとしているかを考えたとき、次のような方法をとることも可能である。例えば同じ読み物資料を用いて学習する場合に、視点を変えて読むように指示し、後でそれぞれの視点で読み取った内容を交換し合うなどの方法もある。このような方法を用いれば、日常的な学習活動の中に無理なくジグソー法を取り入れていくことができるのではないだろうか。実はこの方法は飯窪助教からアドバイスしていただいたものであるが、研究の中心で取り組まれている方からそのようなアドバイスをいただくことで、今後ジグソー法の考え方を日常の授業に広げてアイデアのバリエーションが豊かになるように感じた。

③ 授業で大切にしたいことを再認識

上で紹介した教師の感想の中にも「実態に合った授業、ねらいの明確化、具体的な発問など、普段の授業でもっと鍛えるべき所がジグソー法の授業でも大切」という言葉にも表れているように、ジグソー法を取り入れれば何でも上手くいくというわけでは無い。日々の授業で大切にすべき事はやはり大切に、普遍的なものである。ジグソー法を取り入れる、取り入れないは別にして、実態、つきたい力、ねらい、評価という学習の要となるものをしっかり意識して日々の授業を展開する大切さを再認識できた。

【 課 題 】

① 活動中の教師の役割

ジグソー法はグループでの活動が多くなるため、一人の教師が子どもたちの状況を把握するのが難しい面がある。机間指導の際の見とり方、話し合いの質を高めるような助言のあり方など、教師の役割をどのように位置づけるかが難しく、今後更に追究したい。

② 発達段階への配慮

本校では小学校1年生から中学校3年生までの幅広い児童生徒にジグソー法を取り入れた授業を実施している。しかし、低学年の児童は文字を読むことさえままならない状況も見られエキスパート活動自体にも無理がある面がある。本校ではジグソー法の3つの段階を低、中、高学年の枠組みの中で段階的に力量形成する方向で研究を進めている。この方法が適切かどうかは今後の研究の中で検証していきたいと考えるが、発達段階に応じた何らかの配慮は必要ではないかと考えている。

③ 実践の積み上げ

研究を進めるにあたって、全職員を対象に自主公開学習を積極的に行い、学習場面を公開し合おうと呼びかけた。実際のところ自主公開の気運はあまり高まらず、個人的な非公開の実践にとどまってしまっている。誰しも不安な授業を公開するのは嫌なものである。だが、実践の積み上げがあつてこそ、研究の成果はより確かなものになっていく。若い先生の多い本校の強みを生かして、積極的なチャレンジを奨励し、実践の積み上げを呼びかけながら取組を進めていきたい。